

あかしん

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

プランニング・デザイン・総合印刷・オンデマンドデジタル印刷・可変データ印刷
大判ポスター出力・データベース・PDF高速データ変換・CD-ROM制作・
3D・CGアニメーション企画・制作



半田中央印刷株式会社

〒475-0032 半田市潮干町1番地の21
TEL <0569> 29-2525 (代) FAX <0569> 29-4500
E-mail: main@handa-cp.co.jp <http://www.handa-cp.co.jp>

元氣のでてくる“ことばたち” (131)

村上信夫

(アナウンサー)



日々が続いた。野球熱も冷めず、高校(半田商)でも野球、名古屋学院大学でも野球。だが、肩を壊し、野球を断念した。そして、いよいよ、大学卒業後、音楽の道でプロになる事を目指す。

受けるが、不合格が続いた。どこまでも運のなさが付きまとう。ライブハウスで歌いながら、アルバイトで食いつなぐ日々だった。

歌手になれない

30歳を過ぎて、さらに3人の女の子が生まれた。そして待望の長男も誕生し、荒川さんは、5人のパパとなる。どんなときも

パパは夢を持っていてスゴイ

歌手 パパ荒川さん

パパ荒川さんは、50歳で念願の歌手デビューをかなえた。26年前、歌手を目指して、愛知県から上京したものの、夢を持ち続けても、なかなか夢はかなわない。いつしか、5人の子のパパとなったものの、生活も困窮し、音楽活動もままならなかった。深夜トラックの運転手をして、家族を支えていた荒川さんだが、今年に入って風向きが変わり、トントン拍子に、歌手デビューの話が舞い込んできた。デビュー曲は、「こどもたちへ」。父親からの感謝のメッセージを伝える歌だ。

歌手になりたい

荒川さんは、1958年、長崎県長崎市池島(旧・西彼杵郡外海町池島)の生まれ。3人兄弟の末っ子だった。父は、炭鉱で働いていたが、転職することになり、小学校3年の時、愛知県大府市にやってきた。そこで、野球を始め、以来、甲子園を目指す野球少年になった。

歌う事も好きだった。小学校4年で初めて買ったレコードは、なんと内山田洋とクールファイブの「この愛に生きて」。おませな少年だった。中学3年の時に、井上陽水の「傘がない」に衝撃を受け、自分も歌いたい、ギターを買ってもらい、野球の合間に歌う

1981年、プロ歌手になるべく、婚約者の伊東子(いつこ)さんを残して、上京した。しかし、活動もはかどらず、遠距離恋愛にも耐えきれず、翌年、愛知に戻った。伊東子さんは、妊娠した。いわゆる「出来ちゃった婚」になるはずだったが、結婚を承諾してもらおうと、伊東子さん宅を訪れたところ、父親に一喝され殴られたあげく、断られてしまった。妹の計らいによって、東京へ駆け落ちするのだが、伊東子さんの父が倒れ、再び愛知に戻る事になる。

歌手への道を諦め、就職する事で結婚を許してもらった。地元金融関係の会社に就職した。3年間勤めたが、夢を失い、稼ぐためだけに働く事に違和感を覚えた。1985年、27歳の時に再度の上京を決意。妻子を連れて上京した。当時は空前のバンドブームだった。オーディションを次々



■村上信夫プロフィール
NHK エグゼクティブアナウンサー
1953年、京都生まれ。
明治学院大学卒業後、1977年、NHK 入局。
富山、山口、名古屋、東京、大阪に勤務。
現在は、『ラジオビタミン』担当。(ラジオ第一 8:30~11:50)
これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。
教育や育児に関する問題に関心を持ち続け、横浜市で父親たちの社会活動グループ『おやじの腕まくり』を結成。
趣味は、将棋。
著書に『元氣のでてくることばたち!』(近代文芸社)、『おやじの腕まくり』(JULA出版局)、『いのちの対話(共著)』(集英社)、『いのちとユーモア(共著)』(集英社)

続けた夢「歌手」。それが消えかけていた。そんな時、『次女事件』が起こる。1996年の夏、高1になった次女は、学校でバンドを結成したが、人間関係がうまくいかず、夏休みにバンドを解散し、家で腐っていた。その次女に向かって荒川さんが「いい加減になるなよ!」と喝をいれた。その時に事件は起こった。

「お前こそ、何だよ!今のオヤジは!夢見ていたはずの音楽も、仕事も両方いい加減。情けないよ!」と、次女に逆ギレされた。2階に駆け上がり泣いた。夜の仕事をトラックに乗っている時、また泣いた。「自分は何かのか?子どもたちに何を残せるのか?」自問自答するうち、自然と歌詞が湧いて出てきた。

「欲しいものも好きな事も我慢させてごめんよ、その日の食べる事で精一杯だった」「あきらめない勇氣、どこまでも信じる力、人を裏切らない誠実さと、愛を貫いて生きていく事。それだけを伝えたくて」と綴った。これが「娘たちへ(こどもたちへ)」という曲になった。ライブ活動を少しずつ再開した。2006年4月、ライブハウスで子どもたちの前で、この曲を初めて披露した。家族が号泣した。

歌手になれた

父の背中を見て、子どもたちも、いつしか「歌う」喜びに目覚め、時折、荒川家の「ファミリーコンサート」も開催していた。それが新聞でとりあげられ、その記事に、あるプロダクションが目をつけた。そして、トントン拍子にデビューが決定したのだ。あれほどつかもうとしてつかめなかった夢が、



俳画/イネ・セイミ

村上信夫 村上行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

好評発売中




イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女、猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

俳画教室開講中

常滑屋
とき 月二回 第二・第三金曜日
午後一時~三時
会費 一回 二二五〇円(三ヶ月分前納制)
問合せ ☎〇五六九三三五〇四七〇

フルート奏者 **イネ・セイミ**
一音一音
いとおしむように
奏でる音色
貴方に幸せを
届けます

コンサート依頼はこちらへ
☎0563(32)0583
(セイミオフィス)

慈愛の人・良寛 (51) 杉本武之

良寛の死(その2)

前回に引き続き、良寛の最期の様子を、残された記録から見ていきたいと思います。

「師走の末つ方、俄に重らせ給ふ由、人のもとより知らせたりければ、打ち驚きて、急ぎまうで見奉るに、さのみ悩ましき御気色にもあらず、床の上に坐しおたまへるが、己が参りしを嬉しと思ほしむ。《いついつと待ちにし人は来りけり 今逢ひ見て何か思はむ》むさし野の草葉の露のながらひてながらひ果つる身にしあらねば」

かかれば、昼夜御傍らに在りて、御ありさま見奉りぬるに、ただ日にそへて弱りに弱りゆき給ひぬれば、いかにせん、とてかかても遠からず隠れさせ給ふらめと思ふに、いと悲しくて、《生き死にの境離れて住む身にもさ

らぬ別れのあるぞ悲しき(貞心尼)。御かへし。裏を見せ。表を見せて。散るもみぢ(良寛)』

「四日の日、また塩のり坂の雪かき分けつ、まうでて見奉れば、今は頼む方なく、いといたう弱り給ひながら、見つけて嬉しとおぼししこそ悲しかりしか。かくて六日の日の申の時(午後4時頃)に、つひに消え果てさせ給へる。あへなし(あつけない)とも悲しとも、思ひわくかたなかりし。(中略)八日の夜、野に送り参らせし煙さへ、ほどなく消えて、儂き灰のかきりを、御形見と見奉る。また儂しかし」

このようにして、良寛は天保2年(1831)1月6日午後4時頃、世話になつていた木村家の草庵で、弟の由之、弟の貞心尼や遍澄、木村家の人たちなどに見とられて

74年の生涯を閉じたのです。晩年の良寛のもとに出入りしていた僧証職は、良寛の死の前後の様子を次のように書いています。現代語に直します。「天保元年の冬から体調を崩した。死に臨んで、みんなが環座して遺言を聞いています。

「高僧などにはよく有る事にて、珍しからぬ事に候へうぞ。一目拝ませ給はれど、泣く泣く手をすりて願ひければ、不憚に思ひ、さらばとて棺を開きけるに、顔色少しも変はず、生けるがごとくなければ、皆驚き、是れは是れはと、多くの者、立ち代はり拝み拝みて、果てしなれば、やがて蓋覆ひ、火をかけた、送りの人々も、煙と共に立ち別れ帰る。日暮れては、代はる代はる、人々、野の御見舞ひに参りければ、我も共に行けるに、とくとく燃へ出づる火、みな五色なりければ、こは必ず舍利(光沢のある残骨)の多くある故ならんと、翌朝大勢の者、参り灰を開き見るに、背中の大骨みな五色にて、ふしぶしは殊に美しく、人々皆手に取り上げ見つつ、是れを細工物にでもしたら見事ならん、など戯れ言ふ者も有りし。舍利は数知らず。人々、拾ひて持ち帰りぬ。墓は島崎村・隆泉寺境内に有り」

さて、葬儀は1月8日に、曹洞宗五か寺の8人の僧が中心になって執り行われましたが、他に真言宗、浄土真宗、日蓮宗の十一か寺の住職も読経しました。16もの寺の僧侶が集まったのです。良寛が特定の宗派にこだわらず、どの寺の僧たちともわけ隔てなく付き合っていたことが分かるのと、多くの僧侶たちが寺に属していても、いらない乞食僧の良寛に対して深い敬仰の念を抱いていたこともよく分かります。

当時の記録には会葬者千余人と記されています。火葬場までの3丁(約330メートル)の雪道を、葬送の列が延々と続き、先頭が火葬場に到着しても、まだ棺は木村家から出なかつたと伝えられています。正月はじめ、雪が降っていたにもかかわらず、宮中から下賜される最高の称号などあるわけはありません。和尚という法階さえ正式にはなかつたのです。厳しい封建時代において、見つかれば、公儀・宗門の忌諱に触れることは確実です。しかし、良寛の墓を建てた人たちは、称号など一つも持っていない良寛こそ、禅師とい

う最高の資格をすべて備えた偉大な僧侶だったということの後世に伝えるために、取り壊しも覚悟で「良寛禪師墓」と大きく刻み込んだのでした。案の定、代官所の役人は、木村家の当主を呼び出し詰問しました。

碑面の左側には「やまたづの向かひの岡に小牝鹿立てり 神無月しぐれの雨にぬれつつ立てり(大意)一向かの岡に牡鹿が立っている。十月の冷たい時雨の雨に濡れながら立っている」が彫られました。この旋頭歌は、苦しい生涯を雄々しく生き抜いた良寛の姿を象徴的に詠んだものとして、千四百首以上もある歌の中から弟の由之が選んだものです。

また右側には、長詩「僧伽」の、全部で260字もの漢字がびっしりと刻まれました。この「僧伽」の中で、良寛は寺院仏教の腐敗堕落を厳しく糾弾しています。激烈な語句がいっぱい詰まっています。彼より少し前に生きた革命的思想家安藤昌益ほどではないにしても、当時の仏教界に対して強く攻撃している良寛の姿は、私たちが抱いている温和で純朴な人と

いうイメージから遠く離れています。少し引用します。「白衣世俗の人にして道心なきは、なほお是れ恕すべし。出家にして道心なきは、これ其の汚れを如何せん。」「今、仏弟子と称し、行も無く亦た悟りも無し。徒らに檀越の施(檀越からの施し)を費し、三業相顧みず(仏道の修行も怠つて)いる。」「たとひ乳虎の隊に入るとも、名利(名誉や利益)の路を踏むなかれ。名利わずかに心に入らば、海水も亦た濯ぎがたし。」「今よりつらら思量し、なんじの其の度(その考え)方を改むべし。勉めよや後世の子、自ら懼怖を遺すなかれ(修行の苦しさを恐れてはならない)」

京都大学文学部卒業。翻訳業を経て、小学校教師になるために愛知教育大学に入学。25年間、西尾市の小中学校に勤務。定年退職後、名古屋大学教育学部の大学院で学ぶ。
《趣味》読書と競馬

「師走の末つ方、俄に重らせ給ふ由、人のもとより知らせたりければ、打ち驚きて、急ぎまうで見奉るに、さのみ悩ましき御気色にもあらず、床の上に坐しおたまへるが、己が参りしを嬉しと思ほしむ。《いついつと待ちにし人は来りけり 今逢ひ見て何か思はむ》むさし野の草葉の露のながらひてながらひ果つる身にしあらねば」

かかれば、昼夜御傍らに在りて、御ありさま見奉りぬるに、ただ日にそへて弱りに弱りゆき給ひぬれば、いかにせん、とてかかても遠からず隠れさせ給ふらめと思ふに、いと悲しくて、《生き死にの境離れて住む身にもさ

らぬ別れのあるぞ悲しき(貞心尼)。御かへし。裏を見せ。表を見せて。散るもみぢ(良寛)』

「四日の日、また塩のり坂の雪かき分けつ、まうでて見奉れば、今は頼む方なく、いといたう弱り給ひながら、見つけて嬉しとおぼししこそ悲しかりしか。かくて六日の日の申の時(午後4時頃)に、つひに消え果てさせ給へる。あへなし(あつけない)とも悲しとも、思ひわくかたなかりし。(中略)八日の夜、野に送り参らせし煙さへ、ほどなく消えて、儂き灰のかきりを、御形見と見奉る。また儂しかし」

このようにして、良寛は天保2年(1831)1月6日午後4時頃、世話になつていた木村家の草庵で、弟の由之、弟の貞心尼や遍澄、木村家の人たちなどに見とられて

74年の生涯を閉じたのです。晩年の良寛のもとに出入りしていた僧証職は、良寛の死の前後の様子を次のように書いています。現代語に直します。「天保元年の冬から体調を崩した。死に臨んで、みんなが環座して遺言を聞いています。

「高僧などにはよく有る事にて、珍しからぬ事に候へうぞ。一目拝ませ給はれど、泣く泣く手をすりて願ひければ、不憚に思ひ、さらばとて棺を開きけるに、顔色少しも変はず、生けるがごとくなければ、皆驚き、是れは是れはと、多くの者、立ち代はり拝み拝みて、果てしなれば、やがて蓋覆ひ、火をかけた、送りの人々も、煙と共に立ち別れ帰る。日暮れては、代はる代はる、人々、野の御見舞ひに参りければ、我も共に行けるに、とくとく燃へ出づる火、みな五色なりければ、こは必ず舍利(光沢のある残骨)の多くある故ならんと、翌朝大勢の者、参り灰を開き見るに、背中の大骨みな五色にて、ふしぶしは殊に美しく、人々皆手に取り上げ見つつ、是れを細工物にでもしたら見事ならん、など戯れ言ふ者も有りし。舍利は数知らず。人々、拾ひて持ち帰りぬ。墓は島崎村・隆泉寺境内に有り」

さて、葬儀は1月8日に、曹洞宗五か寺の8人の僧が中心になって執り行われましたが、他に真言宗、浄土真宗、日蓮宗の十一か寺の住職も読経しました。16もの寺の僧侶が集まったのです。良寛が特定の宗派にこだわらず、どの寺の僧たちともわけ隔てなく付き合っていたことが分かるのと、多くの僧侶たちが寺に属していても、いらない乞食僧の良寛に対して深い敬仰の念を抱いていたこともよく分かります。



良寛禪師墓

を求めた。師は口を開いて、ただ一声「阿」と言った。きちんと坐して死去した。天保2年正月6日。世寿74年。法臘僧になつてから53年。死に顔はまだ生きているようだった。誰も彼も、とても悲しんだ。火葬の日、千人以

ど、目の当たり見し事に候へば、御話し申し上げ参らせ候師病中、さのみ御なやみもなく、眠るがごとく坐化し給ひ、四日目の新しきにて、御棺を野辺に送り、引導も済みし頃、下三条辺りの者として、一人馳せ来たり。どうぞど

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

を求めた。師は口を開いて、ただ一声「阿」と言った。きちんと坐して死去した。天保2年正月6日。世寿74年。法臘僧になつてから53年。死に顔はまだ生きているようだった。誰も彼も、とても悲しんだ。火葬の日、千人以

ど、目の当たり見し事に候へば、御話し申し上げ参らせ候師病中、さのみ御なやみもなく、眠るがごとく坐化し給ひ、四日目の新しきにて、御棺を野辺に送り、引導も済みし頃、下三条辺りの者として、一人馳せ来たり。どうぞど

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

を求めた。師は口を開いて、ただ一声「阿」と言った。きちんと坐して死去した。天保2年正月6日。世寿74年。法臘僧になつてから53年。死に顔はまだ生きているようだった。誰も彼も、とても悲しんだ。火葬の日、千人以

ど、目の当たり見し事に候へば、御話し申し上げ参らせ候師病中、さのみ御なやみもなく、眠るがごとく坐化し給ひ、四日目の新しきにて、御棺を野辺に送り、引導も済みし頃、下三条辺りの者として、一人馳せ来たり。どうぞど

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。

「こん、こん、とん」と舌をならしてあやしてやりましょう。目をキョロ、キョロさせて音のみなもとを捜すでしょう。そして、捜せたときの安心しきった笑顔から喜びの声を発することでしょう。

「べろべろ、べー」と言つて舌(べろ)を出してやると、大きな目をして反応します。時には、赤ちゃんの頬(ほっぺ)に頬を押し

ついたり、息を吹きかけたりにしてやるのもいいでしょう。いろいろな反応が返ってきます。



杉本武之プロフィール

京都大学文学部卒業。翻訳業を経て、小学校教師になるために愛知教育大学に入学。25年間、西尾市の小中学校に勤務。定年退職後、名古屋大学教育学部の大学院で学ぶ。
《趣味》読書と競馬

「師走の末つ方、俄に重らせ給ふ由、人のもとより知らせたりければ、打ち驚きて、急ぎまうで見奉るに、さのみ悩ましき御気色にもあらず、床の上に坐しおたまへるが、己が参りしを嬉しと思ほしむ。《いついつと待ちにし人は来りけり 今逢ひ見て何か思はむ》むさし野の草葉の露のながらひてながらひ果つる身にしあらねば」

かかれば、昼夜御傍らに在りて、御ありさま見奉りぬるに、ただ日にそへて弱りに弱りゆき給ひぬれば、いかにせん、とてかかても遠からず隠れさせ給ふらめと思ふに、いと悲しくて、《生き死にの境離れて住む身にもさ

らぬ別れのあるぞ悲しき(貞心尼)。御かへし。裏を見せ。表を見せて。散るもみぢ(良寛)』

「四日の日、また塩のり坂の雪かき分けつ、まうでて見奉れば、今は頼む方なく、いといたう弱り給ひながら、見つけて嬉しとおぼししこそ悲しかりしか。かくて六日の日の申の時(午後4時頃)に、つひに消え果てさせ給へる。あへなし(あつけない)とも悲しとも、思ひわくかたなかりし。(中略)八日の夜、野に送り参らせし煙さへ、ほどなく消えて、儂き灰のかきりを、御形見と見奉る。また儂しかし」

このようにして、良寛は天保2年(1831)1月6日午後4時頃、世話になつていた木村家の草庵で、弟の由之、弟の貞心尼や遍澄、木村家の人たちなどに見とられて

74年の生涯を閉じたのです。晩年の良寛のもとに出入りしていた僧証職は、良寛の死の前後の様子を次のように書いています。現代語に直します。「天保元年の冬から体調を崩した。死に臨んで、みんなが環座して遺言を聞いています。

「高僧などにはよく有る事にて、珍しからぬ事に候へうぞ。一目拝ませ給はれど、泣く泣く手をすりて願ひければ、不憚に思ひ、さらばとて棺を開きけるに、顔色少しも変はず、生けるがごとくなければ、皆驚き、是れは是れはと、多くの者、立ち代はり拝み拝みて、果てしなれば、やがて蓋覆ひ、火をかけた、送りの人々も、煙と共に立ち別れ帰る。日暮れては、代はる代はる、人々、野の御見舞ひに参りければ、我も共に行けるに、とくとく燃へ出づる火、みな五色なりければ、こは必ず舍利(光沢のある残骨)の多くある故ならんと、翌朝大勢の者、参り灰を開き見るに、背中の大骨みな五色にて、ふしぶしは殊に美しく、人々皆手に取り上げ見つつ、是れを細工物にでもしたら見事ならん、など戯れ言ふ者も有りし。舍利は数知らず。人々、拾ひて持ち帰りぬ。墓は島崎村・隆泉寺境内に有り」

さて、葬儀は1月8日に、曹洞宗五か寺の8人の僧が中心になって執り行われましたが、他に真言宗、浄土真宗、日蓮宗の十一か寺の住職も読経しました。16もの寺の僧侶が集まったのです。良寛が特定の宗派にこだわらず、どの寺の僧たちともわけ隔てなく付き合っていたことが分かるのと、多くの僧侶たちが寺に属していても、いらない乞食僧の良寛に対して深い敬仰の念を抱いていたこともよく分かります。

当時の記録には会葬者千余人と記されています。火葬場までの3丁(約330メートル)の雪道を、葬送の列が延々と続き、先頭が火葬場に到着しても、まだ棺は木村家から出なかつたと伝えられています。正月はじめ、雪が降っていたにもかかわらず、宮中から下賜される最高の称号などあるわけはありません。和尚という法階さえ正式にはなかつたのです。厳しい封建時代において、見つかれば、公儀・宗門の忌諱に触れることは確実です。しかし、良寛の墓を建てた人たちは、称号など一つも持っていない良寛こそ、禅師とい

う最高の資格をすべて備えた偉大な僧侶だったということの後世に伝えるために、取り壊しも覚悟で「良寛禪師墓」と大きく刻み込んだのでした。案の定、代官所の役人は、木村家の当主を呼び出し詰問しました。

碑面の左側には「やまたづの向かひの岡に小牝鹿立てり 神無月しぐれの雨にぬれつつ立てり(大意)一向かの岡に牡鹿が立っている。十月の冷たい時雨の雨に濡れながら立っている」が彫られました。この旋頭歌は、苦しい生涯を雄々しく生き抜いた良寛の姿を象徴的に詠んだものとして、千四百首以上もある歌の中から弟の由之が選んだものです。

知多の新鮮たまご 発酵ケイフン

(有)知多エッグ

知多郡武豊二ツ峯380 TEL0569-73-6341

誠意をこめて安心のお手伝い 年中無休・24時間体制

(有)大阪屋葬祭

常滑ホール 鬼崎ホール 阿久比ホール

TEL<0569>35-4949 (代表) FAX 35-4911

申込み期限 十月十七日(水)

▼男性料理教室 十一月一日(金)午前九時半〜正午 内容 創作料理作り 講師 エプロンおとうさん

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)

▼常滑市立図書館

▼常滑市児童館親子ミニソフトパレード大会(五五五)

▼第4回となみ女子剣道大会(六日)

▼鬼崎地区ビーチボール大会(六日)

▼愛知県高等学校卓球選手権 東海地区予選会(十二日)

▼常滑市スポーツ少年団フェスティバル2009(十三日)

▼大野パルティン スポーツ少年団(十九日)

▼常滑市ソフトボール大会(二十日)

▼第103回 常滑市民バスケットボール大会(二十七日)

▼常滑市立図書館

▼鬼崎木版画教室作品展(五日)

▼常滑市立図書館

▼ティッシュ展(六日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼長良川音楽祭(十七日)

▼中日写真協会常滑支部結成60周年記念サロンド(十七日)

▼常滑市民俗資料館

▼第三回企画展急須のいろいろ(五日)</

愛知県立大学名誉教授

山田正敏

『バリ島行ったり来たり』(21)

《伝統的な

バリ島の村に住む》⑧

——鬱病をも癒した、

田舎の生活環境③——

《快適な自然環境》の村》

自分自身の“体感”によって、バリ島の快適な自然環境の村を選んでみた。人間の体感、私のように高合化すればするほど、感度は鈍化し、正確さを失ってくると言われるが、それはそうだろう。

しかし、自然環境の人間にとっての「快適さ」とは、気温・湿度・標高などの数字の正確さによって決まるものではなく、その人なりの“体感”によって決まるものであり、最終的には「住めば都」と言うように、その人自身の判断によると、私は考えています。

バリ島は、赤道直下南緯八度ほどの熱帯の小島。気候は、熱帯性気候に相違ないが、“体感気候”は南部沿岸地域や州都テンパサールの都会周辺と、多くの島民が、自然の恵みに群がって、農業を基盤に、永年暮らしてきている内陸部の村々とは、明らかに異なっている。

それはバリ島の地形の起伏の大きさによるものだろう。標高の違いの大きさと比べてもよいだろう。

私が、快適さを感じた地域の標



姿を、私はまだ一度も見たことがない。そう言えば、ウブトウ・プリアタン村でも同様だった。

《タオル手拭いも目的外使用》

「バリ島の気候は、高温多湿」という先入観もあって、年二回のこの地域の滞在のおりには、ウブドウ・プリアタン村の場合と同様に、タオルの手拭いを幾度も管理人の奥さんに渡していた。「こゝはウブドウより涼しいし、あまり同じ物でも……」と思い、私なりに配慮して、頂きもとの高級な「タオル・ハンカチ」に切り変えた。

しばらくすると「タオル・ハンカチよりも、前のような長いのがいい」と、管理人夫人が言っている、との話。やはり、暑くて汗拭きが欲しいのか——、と思つて尋ね返すと、タオル手拭いは、女性が頭上にお供えや荷物を載せるためのクッションに、輪のように振^わじつて使うというのだ。

《あくせく働く村人の姿を見ない》

バリ島の中央部にある火山群は、安山岩や玄武岩からなる肥沃な火山灰土をバリ全島の山麓にもたらしてきた。それに加えて、二千米級の山頂には、雨期でなくとも雲のかかることが多く、そうして降った雨は、地下水となつて山を下り、麓で湧き水となつて流れ出し、山麓や平野部に豊かで安定した飲料水や農業用水を提供している。その肥沃な大地と豊かな水に支えられ、この辺りの水田は年2〜3回の作付けがふつうである。収穫と田植が同時に見られる風景には、驚かされました。

《続・バリ島暮らしで、体感している田舎の自然環境》

私たちが滞在している農村は、今までたびたび書き綴ってきたように、バリ島ほぼ中央部バトウカウ山麓の名利、バトウカウ寺院に通じる古くからの農村。バリ島南部の空港・州都から車で約一時間半余り、北西に駆け上ったタバナン県の村です。

政府観光局冊子は、タバナン県を

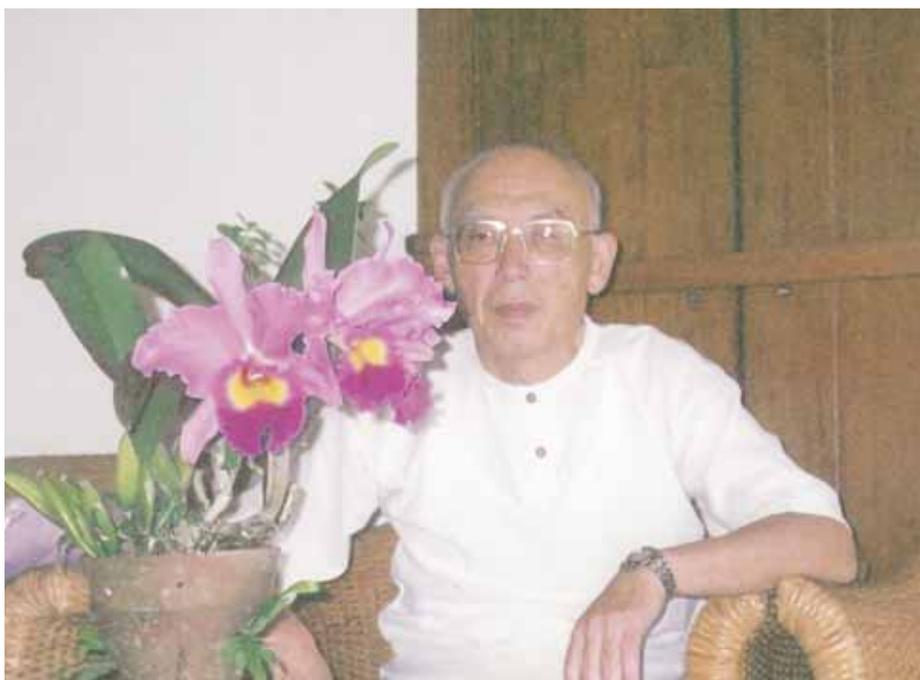
りの高い線香を立て、安寧をお祈りに来る管理人の家族と、涼しくなったテラスに出て夕涼み。

標高四五〇米のわが家のテラスからは、国際空港に離発着する飛行機の灯りと、空港滑走路の明りが点々とよく見える。ジャカルタ行きやオーストラリア行きの航空機灯もよく見える。

水田に水が張られると、前の田ん圃や水路から蛩が舞い、庭の灯にも舞い交う。晴れた夜空は、満天の星。8時すぎの定時には、人工衛星の光が足ばやに軌道を駆けてゆく。又サドウアの塩分を含んだ空気に

害され、わが家の庭木の下に、疎開してきた高価のランの鉢も、次々に大きな花を咲かせる。(写真参照)人間だけでなく、植物までも癒している、この村の快適な自然環境には、改めて目を見張った。

それに引きかえ、星座の名前も、多様に咲き乱れている庭の南国の花々も、果実の名前も、その味も百%近く知らないことを、バリ島に来て改めて自覚させられた。この「私の無知」も、わが家の長閑な夕涼みの「痛快な話題」になつていく。事実でもあるし、「快適に過ごす」ためには、あまり気にしないことにしている。



よみがえった蘭の花

《自然に無知な自己発見》

滞在当初、扇風機を購入する話が、わが家でも持ち上がったが、いうともなく、立ち消えになった。

夕方から夜にかけては、地面の悪霊に、綺麗なチャナン(供物)と香

